「様々な国の留学生　～宗教～」

赤松　咲

日本は無信仰・無宗教の人々が多数です。何らかの信仰・宗教を持っている人々は人口のおよそ２割といわれています。山西大学の留学生は世界各国から集まり、それぞれの宗教を持っています。特に中国と関わりの深い宗教はイスラム教です。中国と陸地で国境を接する国々は全部で１４カ国あり、朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）、 ロシア、外蒙古（モンゴル）、カザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、アフガニスタン、パキスタン、インド、ネパール、ブータン、ミャンマー、ラオス、ベトナムです。そのうちカザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、アフガニスタン、パキスタン、はイスラム教徒の影響が強い国といわれています。ここ山西大学国際交流学院には、イエメン、パキスタン、カフカス、タジキスタンなどのイスラム圏からやってきた留学生が比較的多いです。イスラム教、といわれて思い浮かべることは何でしょうか。一般的に私たちのイメージは「怖い」「過激」というものが多いのではないでしょうか。何故ならば９．１１以降、私たちがテロリストを思い浮かべる時、「イスラム過激派」のイメージがあまりに強くなってしまったからでしょう。私は「キリスト教だから〇〇。」「イスラムだから〇〇。」という風に、十把一絡げに物事を考えるべきではないと思います。ましてや国籍や人種で人々を判断するのは暴力的であると考えています。先ほど述べた、「イスラム教→イスラム過激派→何となく怖い」というイメージを私自身も持っていました。しかし、彼らと触れ合うにつれてそのような先入観を持つべきではないと思いました。イスラム圏で大事なのは「もてなしの精神」です。日本には「ケチ」という言葉がありますが、彼らの国にはそのような言葉が存在するのは稀で、逆に人をもてなす心の広い人間を表す言葉が存在し、子供の名前などにつけるそうです。イスラム教徒は「酒を飲まず、豚肉を食べない」といいますが、全てのイスラム教がお酒を飲まず豚肉を食べずにいるかというと違います。彼らの中には酒を飲む人がいるし、豚肉を食べる人もいます。彼らは私たちと同じように楽しみ、好きな人ができれば恋愛をし、お酒を飲みたければナイトクラブへ行ったり、こ

れといって大きな違いはありません。中には、お酒を飲み過ぎて自己嫌悪に陥る人もいれば完全に割り切っている人もいます。決まった時刻にお祈りをする人もいればそうでない人もおり、人それぞれです。

今回のレポートの題は「宗教」ですが、宗教について語りたいわけではありません（矛盾しているようですが）。同じ宗教のなかにも自らの宗教を「誇り」として持っている者もいれば「戒め」として持っている人もいます。私が感じたのは「〇〇教徒だから、良い」とか言う事ではなく、何かを「誇り」として持っている人々の心が素晴らしいと思いました。それが今回たまたま彼らの述べる「神」であっただけです。プライドとしてではなく、誇りとして何かを自らの心に持つ事が素晴らしいのだと気づきました。その誇りがたとえ「神」であれ「家族」であれ「己」に対してであれ何でも良いのだと思います。その誇りを見つけることは大変なことだろうと思いますが、それを手にすることこそが重要なのだと思いました。

2014/11/10